

# 中日友好病院プロジェクト 評価調査団報告書

平成2年2月

国際協力事業団  
医療協力部



105  
90.7  
MCF

# 中日友好病院プロジェクト 評価調査団報告書

平成2年2月

国際協力事業団  
医療協力部



マイクロ  
フィルム作成

## 序 文

中国政府は、保健医療分野において中国医学と西洋医学の結合による医学の近代化を図る目的で、その中核となる近代医学のモデル病院として中日友好病院の設立と病院運営に係る技術協力を要請越した。

これを受け、わが国は、無償資金協力による中日友好病院の建設とその人員養成のための技術協力を開始することとなった。

昭和56年11月19日に本件技術協力にかかる討議議事録(R/D)を署名・交換し、3カ年間の協力を行なうとともに更に、昭和59年10月22日より5カ年間の協力を行なうこととし、のべ8カ年間にわたり実施することとなった。

今般、当事業団は、討議議事録による協力期間が平成元年10月21日をもって終了するのに先立ち、これまでの協力内容および成果につき、中国側と合同で評価するとともに、その結果を踏まえ、協力継続の可否を含め、今後の対応を協議することを目的として評価調査団を派遣したものである。

本件調査団は、当初、鳥居有人国立立川病院名誉院長を団長とし、平成元年6月1日から6月10日までの日程で派遣されたが6月4日の中国情勢悪化のため、業務未了のまま帰国せざるを得なかったことから、中国情勢の回復を待つて平成元年10月7日から10月15日までの日程で井出源四郎前千葉大学学長を団長とし、再度派遣したものである。

本報告書は、上記2回の調査団が実施した調査および協議の内容と結果を取りまとめたものである。

ここに、本件調査にあたり、ご協力をいただいた関係各位に対し、深甚なる謝意を表わすとともに、今後とも本件技術協力の成功のためにより一層のご協力をお願いする次第である。

平成2年2月

国際協力事業団  
理事 西野世界



中日友好病院全景



中日友好病院、耿徳章院長よりプロジェクト活動の成果につき報告を受ける。

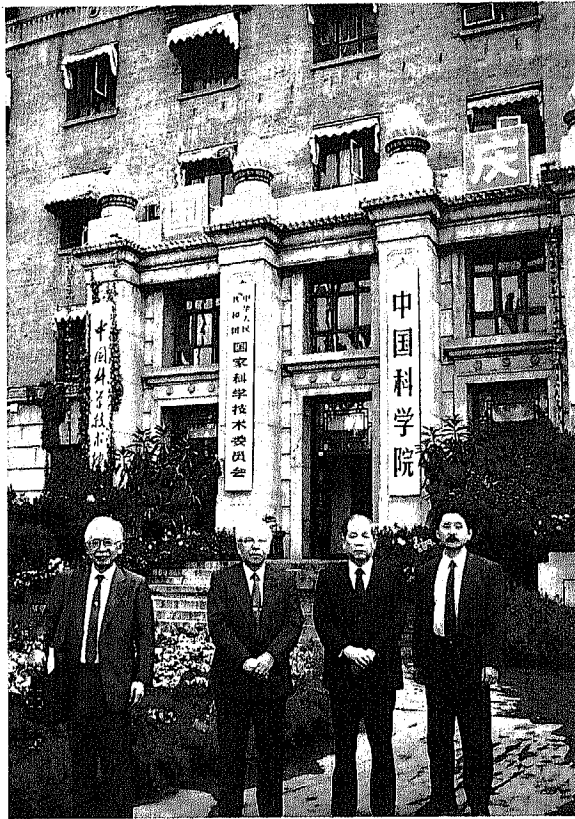


同 上









中国・国家科学技  
術委員会への表敬



中国・国科科学技  
術委員会の張慧春  
処長を表敬





中国・衛生部宋允  
孚外事司長を表彰



同 上



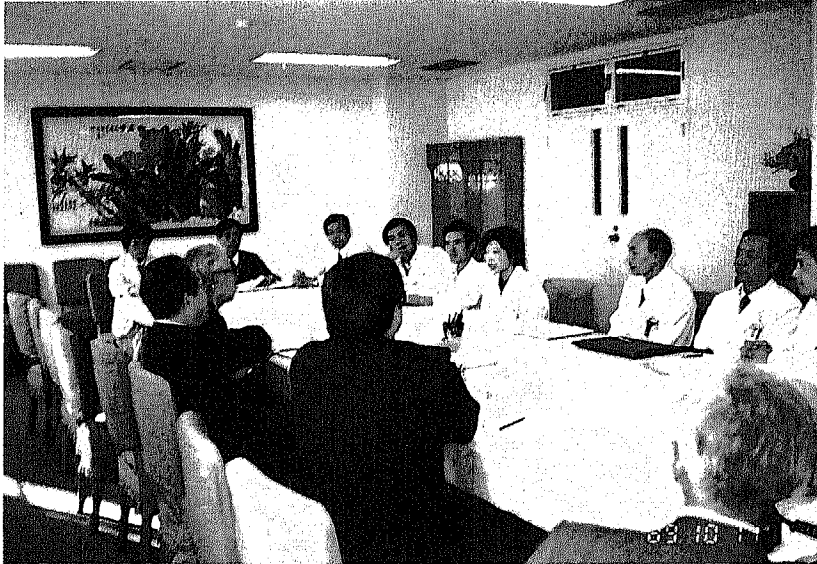


寺坂禮治専門家およびカウンターパートより活動状況の報告を受ける鳥居団

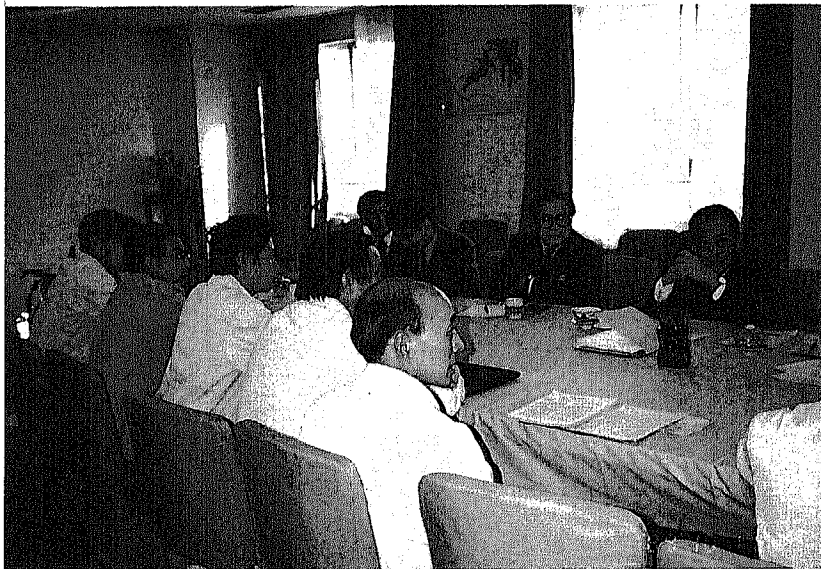


中薬製剤部にて大浜京子専門家より活動状況の報告を受ける平川団員





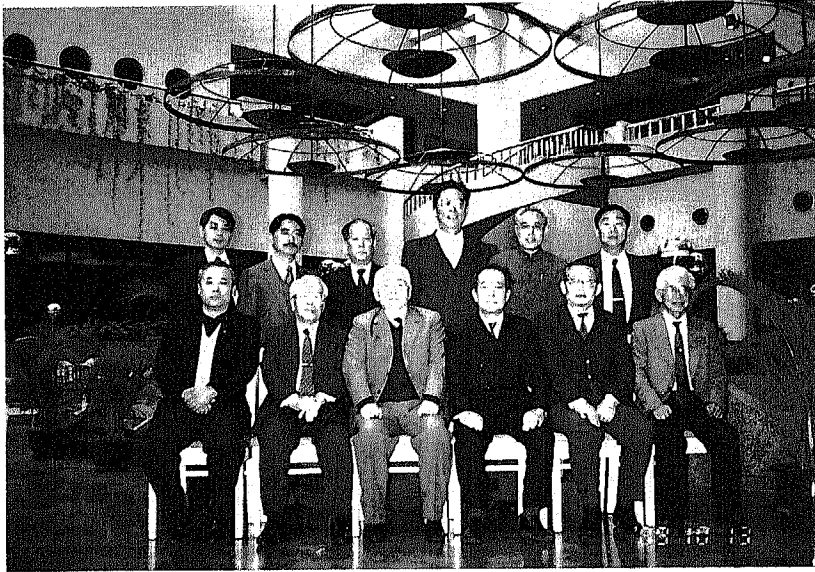
帰国研修員より活動状況の報告を受ける。  
(発表・質疑応答はすべて日本語で行なわれた。)



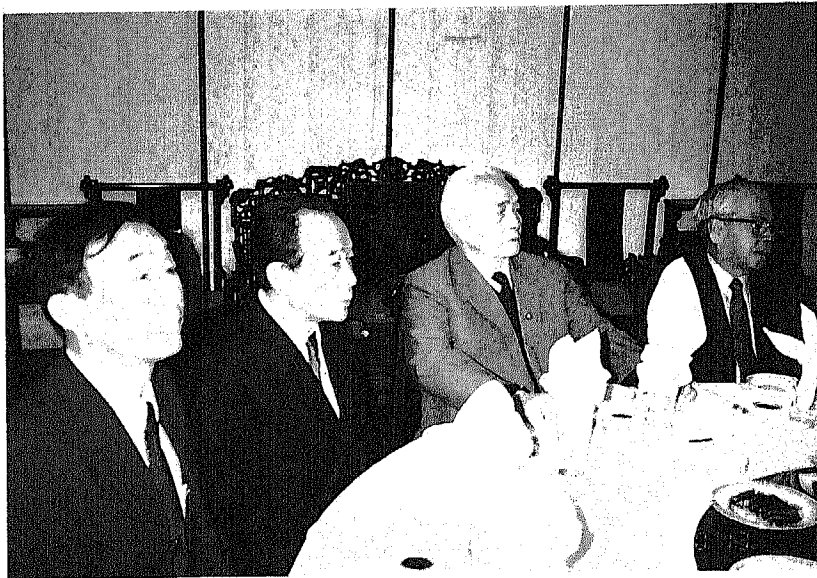
同 上







プロジェクト開始  
当初の関係者



# 目 次

1. 評価調査団派遣 .....	1
1-1 調査団派遣の経緯と目的 .....	1
1-2 調査団の構成 .....	1
1-3 調査日程表 .....	2
1-4 主要面談者 .....	4
1-5 終了時評価の方法 .....	4
2. 要 約 .....	5
3. プロジェクトの当初計画 .....	6
3-1 相手国の要請とわが国の対応 .....	6
3-2 プロジェクト成立と経緯 .....	7
3-3 プロジェクトの目的 .....	8
3-4 プロジェクトのもとでの活動 .....	8
3-5 相手国実施機関 .....	10
4. プロジェクトの実績 .....	11
4-1 プロジェクトの投入実績 .....	11
4-1-1 専門家派遣 .....	11
4-1-2 研修員受入れ .....	11
4-1-3 機材供与 .....	11
5. プロジェクト評価 .....	23
5-1 分野別評価 .....	23
5-2 評価の総括 .....	24
5-3 結 論 .....	66
5-4 取るべき措置 .....	66
6. 教訓及び提言 .....	67
7. 関係資料 .....	
• 合同評価報告書 .....	69
• フォローアップ協力における覚書(案) .....	83
• 討議議事録及び覚書(第一期) .....	87
•       "          (第二期) .....	104
• 中日友好病院プロジェクト総括報告 .....	173
• 中国側運営予算実績(1984~1989) .....	199
• 診断費一覧 .....	201
• 研修員の活動報告 .....	284
• 臨床研究所の活動総括 .....	331



## 1. 評価調査団の派遣

### 1-1 調査団派遣の経緯と目的

中国政府は近代化のための諸政策を実施中であるが、保健医療分野においても、中国伝統医学と西洋医学の結合による医学の近代化を計る目的で、その中核となるべき近代医学のモデル病院として中日友好病院の設立と病院運営に係る技術協力を我が国に要請してきた。

これを受けて日本政府は、本件要請に係る事前調査団を昭和56年8月より派遣し、中国側と協力内容等につき協議した結果、この病院に対して技術協力を実施することとなり、同年11月に実施協議調査団を派遣し、11月19日に本件協力に伴う討議議事録(R/D)への署名交換に至り、30年間のプロジェクト方式による協力を開始した。

しかしながら、中日友好病院は建設途中であったため、上記協力の内容としては研修員の受け入れと短期専門家による医療講演のみに限られていたため、同病院が開院した昭和59年10月18日から本格的協力を行なうための実施協議調査団を派遣し、同年10月22日から5カ年間にわたる技術協力を実施しているものである。

今般、本件討議議事録(R/D)に基づく協力期間が平成元年10月21日をもって終了することに伴い、当初のプロジェクト目標に対し、これまでの協力実施内容と実績の確認および相手側機関との協議を通じ、協力効果を測定し、評価を行なうとともに、協力継続の可否も含め、今後の対応振りにつき、中国側機関と協議することを目的として、平成元年10月7日から同月15日まで、6名の構成で評価調査団を派遣した。

なお、本件調査団は、当初、平成元年6月1日から同月10日までの日程で派遣したが中国情勢悪化のため、業務未了のまま一端帰国させ、同国情勢が安定した後の同年10月7日から同月15日まで再度、派遣したものである。

### 1-2 調査団の構成

#### (第一期)

団 長(総 括)	鳥 居 有 人	国立立川病院名誉院長
団 員(内 科)	廣 川 浩 一	国立精神・神経センター国府台病院院長
団 員(臨床医学)	河 合 忠	自治医科大学教授
団 員(病院管理)	古 川 哲 二	聖マリア病院顧問
団 員(技術協力)	平 川 繁 行	外務省経済協力局技術協力課事務官
団 員(協力評価)	立 場 正 夫	国際協力事業団医療協力部医療協力課課員

#### (第二期)

1. 団 長 井 出 源 四 郎 総 括 前 千 葉 大 学 学 長

2. 団員 鳥居 有人 外科 国立立川病院名誉院長
3. 団員 廣川 浩一 内科 国立精神・神経センター国府台病院  
院長
4. 団員 古川 哲二 プライマリーケア 聖マリア病院顧問
5. 団員 植澤 利次 技術協力 外務省経済協力局技術協力課事務官
6. 団員 立場 正夫 協力評価 国際協力事業団医療協力部医療協力  
課課員

(第一期)

日順	月日	曜日	時間	スケジュール
1	6月1日	木	13:15 15:00 18:00	成田→北京着(JL781便) 日程確認・団員打合せ 日本側事前打合せ
2	6月2日	金	9:15 10:30 14:00 15:30 18:00	JICA中国事務所打合せ 日本大使館打合せ 国家科学技術委員会表敬 衛生部表敬 中日友好病院招宴
3	6月3日	土	9:30 14:00 18:00	中日友好病院表敬・打合せ 日本人専門家との打合せ 日本大使館招宴
4	6月4日	日		中国情勢悪化のため宿舎にて待機
5	6月5日	月		中国情勢悪化のため宿舎にて待機
6	6月6日	火		中国情勢悪化のため宿舎にて待機
7	6月7日	水	18:00	鳥居団長他4名帰国 NH1992便
8	6月8日	木	13:30	立場団員帰国 JL2780便

( 第二期 )

日順	月 日	曜日	時 間	ス ケ ジ ュ ー ル
1	10月7日	土	13:15 15:00 18:00	成田→北京着 ( J L 7 8 1 便 ) 日程確認・団員打合せ 日本側事前打合せ
2	10月8日	日		資料整理
3	10月9日	月	9:15 10:30 14:00 15:30 18:00	J I C A 中国事務所打合せ 日本大使館打合せ 国家科学技術委員会表敬 衛生部表敬 中日友好病院招宴
4	10月10日	火	9:30 14:30 18:00	中日友好病院表敬及び打合せ ( 中国側自己評価内容の説明 ) 中日友好病院との打合せ 鳥居団員到着 ( C A 9 2 6 便 )
5	10月11日	水	9:30 14:30	中日友好病院との打合せ ( 研究・臨床各科状況説明 ) 中日友好病院との打合せ ( 研修員・機材調査 )
6	10月12日	木	9:30 14:00 18:00	中日友好病院との打合せ ( 中央診療系 ) 合同評価報告書内容及び今後の協力に関する協議 日本側答礼宴
7	10月13日	金	9:00 11:00 15:10 18:00	中日友好病院との打合せ 日本大使館への報告 井出団長帰国 ( J L 7 8 2 便 ) 日本大使館招宴
8	10月14日	土	9:30 11:00	国家科学技術委員会への報告 衛生部への報告 資料整理
9	10月15日	日	15:30	北京→ ( 上海経由 ) 成田着 ( J L 7 8 2 便 )

#### 1-4 主要面談者

〔中日友好病院〕	耿 德 章	院長
	辛 育 齡	前院長
	王 潤 芝	党書記
	徐 丹	院長助理
	李 忠 祥	党副書記
	許 承 銘	病院事務室主任
	曾 憲 法	外事處處長
	齊 興 波	医務處處長
〔衛 生 部〕	顧 英 奇	副部長
	宋 允 孚 孚	外事司司長
	趙 同 彬	連絡処副処長
	李 維 平	職員
〔国家科学技術委員会〕	張 慧 春	日本処副処長
	葉 冬 柏	日本処処員
〔その他中国側関係者〕	錢 信 忠	中国共産党中央顧問委員会委員
	劉 文 泉	中医学院付属病院長
	董 玉 昌	中国国家家族計画委員会
〔日 本 大 使 館〕	久保田 穰	公使
	小 林 二 郎	参事官
	小 島 高 明	参事官
	鈴 木 裕 太 郎	医務官
	山 口 壯	一等書記官
	岡 田 敏 浩	二等書記官
〔JICA中郡事務所〕	田 口 定 則	所長
	佐 藤 保 雄	次長
	鈴 木 有 津 子	所員

#### 1-5 終了時評価の方法

今回の評価調査における評価の方法は、本プロジェクトの討議議事録（R/D）を土台として、過去の計画打合せおよび巡回指導調査団の訪中時に署名・交換したミニッツ、A1～A4フォームによる要請文書をもとに、現地にて派遣中の専門家も含め、中国側関係者が参加し、病院、衛生学校および臨床研究所等の視察を行ない、臨床活動状況、医療要員養成状況、研究実施状況を調査するとともに供与機材の稼働状況を調査した。加えて、こ

これらの中国側担当スタッフから説明を開き、日本側の技術協力効果につき、質疑を行った。

この結果をもとに日中双方は、合同会議において、これまでのプロジェクト活動状況と実績を確認・検討し、本件技術協力の効果を測定・評価したものである。

## 2. 要 約

中国における医療水準の向上と医療供給のアンバランスを解消すること、及び中国医学と西洋医学の近代化を目指し、その中核となる近代医学のモデル病院として、中日友好病院の建設と病院運営に係る技術協力を要請越した。

これを受けて我国は昭和55年から59年にかけて無償資金協力により建物を建設し、機材を供与した(総額160億円)。更に62年度にも5億円の機材を無償供与した。また、昭和56年11月19日に本件R/D(討議議事録)の署名・交換をもって3年間の協力を開始し、更に昭和59年10月22日より5か年間の協力を行なうこととし、合計8年間の協力を実施してきた。この間、派遣専門家136名を派遣し、研修員193名を受け入れ、2.9億円の機材供与を行なった。

病院は昭和59年10月に開院して以来、患者数が確実に増加しており、現在の1日の外来患者は約1000人、入院患者も1000人を越えている。また、医師数約550人、職員数約2,600人である。

本件評価調査にあたっては、プロジェクト開始時(昭和56年11月)から現在(平成元年10月)までの間における協力計画と実績につき、日中双方が合同で調査、協議した結果、日本側より提出した合同評価報告書の内容でほぼ合意を得て署名・交換した。

その内容の要旨は以下のとおりである。

1. 本プロジェクト討議議事録(R/D)における到達目標は、おおむねその目標に近づきつつあると思われる。到達目標別の評価内容要旨は次のとおりである。

(1) 「相互に合意した特定疾病の成因、病態、診断、治療および予防に関する研究の推進」については、喜多悦子長期専門家を中心に血液凝固・線溶検査、血液形態検査の技術指導を行い臨床検査科、病理科、血液科からなる合同研究グループを組織し、「糖尿病における血栓形成の機序と中薬(漢方薬)の効果」を研究した。同専門家帰国後、中国側は独自に研究を進め、衛生部(厚生省)から奨励金研究テーマとして取り上げられるに至った。

高倉公朋短期専門家を中心とした、東京大学医学部、国立病院医療センターと本病院の脳外科による「悪性脳腫瘍の治療効果」の研究は、日本側の指導により100症例の比較検討を終え、平成元年10月末に双方で研究結果を発表するに至った。

(2) 「診療および教育水準の向上」については、外科分野に対し、伊藤英明・中垣充・萱



島孝二・寺坂禮治長期専門家がカルテの記述方法から臓器移植（動物を中心として）に係る技術指導を行った結果、中国側は独自で人体による腎臓移植・すい臓移植を行える水準になった。

内科分野に対し、松井敏幸・興相憲男長期専門家により内視鏡の操作、内視鏡写真の判読、レントゲンフィルムの判読等につき、指導した。両専門家帰国後も中国側は独自に操作・判読の研修会を定期的で開催し、技術向上に努めるまでに至った。また、胃癌患者の診断・治療に関して、病理・外科を含めた合同の定期的カンファレンスを組織し、診断の正確性を高めつつある。

(3) 「病院管理の進展および整備」については、本分野は1985年8月より1987年7月までの2か年間小林太助長期専門家が病院管理分野に於ける指導と助言を行うとともに、鳥居有人、井出源四郎チーフアドバイザーが指導した。その指導内容は主に「会計事務の簡素化」・「患者食の改善」・「患者サービス」の三点である。本件技術指導の中で最も困難な分野であった。中国側はこのような大型病院の運営管理の経験が不足していることから、今後も引き続き、病院管理分野の人材養成に努め、その水準を向上させる必要がある。

料金支払いについて、当初各セクションで徴収していた制度を改め、一部につき一括徴収の制度を導入している。また、患者食については、洋食、日本食、回教食など患者の趣向に合わせた物を提供するなど改善が見られるが、患者に対する治療食制度の実施がまだ厳格に行われていない。

2. 上記に照らして、本プロジェクトの目的を確実に達成させるためには、現在、実施中の共同研究（悪性腫瘍治療比較、肝臓移植）の完成および総合的な診療のできる人材、病院管理分野の人材養成に努めることが肝要であり、そのため、本協力に引き続き3カ年間のフォローアップ協力が必要であると判断される。

### 3. プロジェクトの当初計画

#### 3-1 相手国の要請とわが国の対応

中国政府は、現在近代化のための諸政策を遂行中であり保健医療分野においては、中国の漢方医学と西洋の近代医学との結合（中西医結合）による医学の近代化を目指したいとしてそのモデル病院として中日友好病院の設立について協力を要請してきた。

この要請に対しわが国は数次の調査団を派遣して中国側関係当局と協議の結果本病院建設のための基本的事項について合意が成立し、昭和56年1月に詳細設計のためのまた昭和56年8月に病院建設のための交換公文署名のはこびとなったものである。この病院建

設は昭和56年12月2日の起工式後27カ月の工期をもって昭和59年3月完成の予定とした。

この中日友好病院は、1000床の規模をもつ総合病院であるとともに臨床医学研究所、看護学校・リハビリテーション施設を併設するものであり診療・研究・教育の名機能をもつ総合的医療機関といえる。このような近代的総合病院の管理運営は、容易ではないため、本病院の建設構想の時点から日中双方の専門家から技術協力の必要性が強調されていた。このためわが国では、将来中日友好病院の管理・運営にあたる中国人医師を昭和54年に10名、昭和55年に20名を受入れわが国協力機関において研修を実施してきたものであるが、外務省の「中日友好病院協力専門委員会」において技術協力を効果的にかつ計画的に実施すべきとの意見が提示されたのを契機として病院開院時までの間の専門家派遣、研修員受入を主体とした第1次のプロジェクト方式技術協力実施の方針が決定された。

この決定を受けて当事業団では昭和56年3月に堀内団長他9名編成による技術協力事前調査団を派遣し中国の医療技術水準の確認・医療行政教育の実態調査を行なうとともに中国側の要請内容を確認して技術協力の可能性及び妥当性等についての検討を行なった。

この調査の結果中国では約10億の人口のうち8億が農村人口でありこの大部分の中国人に対する医療は1,575千人いるといわれるいわゆる「はだしの医者」が診療にいたることが明らかとなった。この「はだしの医者」は基本的には中医学により訓練されているので、中西医学結合による新しい医療技術が開発され、これが「はだしの医者」に教育訓練を経て還元されるならば中国全土の医療技術の近代化が図れることとなる。

中日友好病院は、基礎医学・臨床医学を通じて西洋医学による中医学の究明とその結合による医学の近代化を目指すものであり、これは、中国医学界の長年の懸案にこたえるばかりか中国国民の健康管理に直接ひ益する極めて画期的で国策に添った重要な事業であるといえる。

わが国では、西洋医学特に基礎医学分野においては優れた知識と実績を有しており、この技術を中国医療関係者に移転することによりこのプロジェクトに貢献することが可能であると判断されるとともに、このプロジェクトの成果は直接中国の10億国民の健康に益することから日・中友好のシンボルとしての位置付けもあり適切な事業であることが確認された。

### 3-2 プロジェクトの成立と経緯

こうした事前調査の結果を踏えて初の日・中間のプロジェクト方式による技術協力を行なうことになったものである。わが国が2国間のプロジェクト方式による技術協力を実施する場合、その実施のための両国政府のとるべき措置及び事業内容等は、討議議事録(Record of Discussions)の方式をもって取極めて実施しているが、日中間には本プロ

プロジェクトが初のケースであることから実施協議調査団派遣前に協力の方式と協力の枠組みについて双方の意見を調整しておく必要があった。この調整任務をもって昭和56年8月鳥居団長他4名から成るR/D事前協議ミッションを派遣した。協議の結果R/D原案のうち一部を除いてほぼ日本側提示案にて了解を取りつけるに至ったものである。

以上の経緯をもって日中双方におけるプロジェクト実施のための基本的な了解が得られたことから、井出源四郎千葉大学医学部長を団長とする実施協議調査団を昭和56年11月16日より派遣し、同月19日に中国側計画実施委員会との間で技術協力に係る討議議事録への署名交換に至り、3カ年間のプロジェクト方式による協力を行ってきた。

しかしながら、中日友好病院は建設途中にあったため、協力内容としては研修員の受入れと医療講演専門家の派遣による協力のみに限られていた。その後、病院建設は順調に進行し、昭和59年6月には中国側への建物の引渡しが完了した。更に10月の開院を控えて、技術協力の継続に関し、同年8月に専門家チームを派遣し、新しい討議議事録による協力内容の策定、議事録案文の細部にわたる中国側との協議を行った結果、双方合意に達したので、昭和59年10月18日から実施協議調査団を派遣し、日本側井出源四郎千葉大学学長、中国側辛育齡中日友好病院院長との間で昭和59年10月22日、5カ年間の技術協力に係る新討議議事録の署名交換が行われるに至った。

### 3-3 プロジェクトの目的

中日友好病院は、①日中友好のシンボルであること、②中国の伝統的医学である中医と西洋医学との結合（中西医結合）という中国独自の政策を追求するモデル病院であること、③中国保健医療分野における近代化モデル病院であること、④機能的に診療を中心にして教育・研究も行ないうる総合的医療センターであること。など主としての4つの使命をもっている。

わが国は、本件プロジェクトをもってこの中日友好病院の使命を達成させるために、同病院の要員を養成すべく近代的医学により、診療・中国伝統医学の基礎研究及び近代的病院運営の各水準を総合的に向上させるため次の目的をもって本プロジェクトを実施することとした。

本プロジェクトは、日本国政府の無償資金協力により日中友好のシンボルとして建設される中日友好病院の使命を遂行するために必要な要員の養成を近代的医学の立場から行うことを目的とする。

### 3-4 プロジェクトのもとの活動

- (1) 相互に同意した特定疾病の成因、病態、診断、治療及び予防に関する研究の推進
- (2) 診療及び教育水準の向上

- (3) 病院管理の伸展及び整備
- (4) その他相互の合意による必要な活動

北京市病院組織図

